

緑資源幹線林道（大規模林道）

置戸・阿寒線の植物的自然について

佐藤 謙

(さとう けん)
 1948年岩手県生まれ。
 北海道大学大学院農学研究所修士課程修了。
 現在、北海学園大学教授。学術博士。
 専門は、北海道の高山植物と植物相、およびそれらの保護研究。

要旨

二〇〇五年七月、置戸・阿寒線の植物的自然、植生と植物相について概況を把握した。それと事業者による調査報告書を照合した結果、後者には自然の把握と評価に根本的な欠陥が認められた。植生調査は精度が低く、植物相の把握はまことに不十分であった。そのため、十二分な自然の調査に基づき、改めて事業自体の再評価が必要であると結論づけた。

一 はじめに

緑資源幹線林道は、大規模林道として長期間、国内各地から多岐にわたる問題点が指摘され、建設の根本となる目的や必要性に疑念が出されてきた。しかし、事業者側の見直しならぬ見直しによって、北海道では今なお三本の長大な路線が残され

たままにある。そうした中で、この林道建設が自然破壊を導く問題については、決してなおざりにできるものではない。本稿は、「平取・襟裳線様似・えりも区間」に関する問題点の指摘（本誌第四三号、佐藤二〇〇五）に引き続き、植生と植物相を中心にみた自然破壊の観点から、「置戸・阿寒線」の問題点を指摘するものである。

置戸・阿寒線は、北海道東部において、置戸町を起点とし、陸別町、足寄町、白糠町を経て阿寒町に至る延長七一・〇㍎、公道利用二八・九㍎を加えると総延長九九・九㍎（森林開発公団一九九五）に及ぶ長大な路線である（図1）。二〇〇五年七月八〜一〇日、筆者は、寺島一男（北海道大規模林道ネットワーク代表）、佐藤与志松（十勝自然保護協会事務局長）の両氏とともに、「置戸・阿寒線」において植物を中心にした自然概況を視察した。七月八日は、置戸町の仁居常呂川流域の春日林道・下春日林道とニオトマム川・新斗満林道に沿って調査し、七月九日は、カネラン峠（陸別町

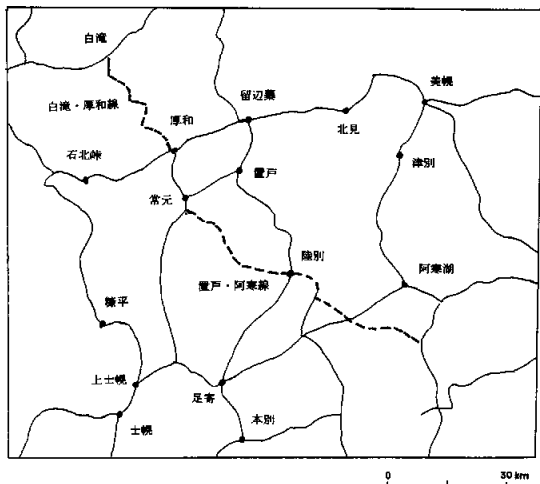


図1 緑資源幹線林道「置戸・阿寒線」の位置図

（足寄町、道道併用）、足寄川十一線の沢林道、茂足寄川、螺湾川（以上、足寄町）および飽別川（阿

寒町)において林道沿いの自然を観察した。七月一日には、阿寒国立公園阿寒富士の南斜面、具体的には庶路川本流林道と奥庶路林道の最奥地(白糠町)にある予定ルートを調査した。

以上のルート沿いの植物的自然について、筆者の植生と植物に関する観察結果に基づき、事業者による調査報告書を照合しながら、置戸・阿寒線の自然環境保全上の問題点を整理してみたい。筆者の調査結果は、地点ごとに立ち止まって観察した結果に、走行中の車窓から確実に判別できる出現植物の記録を併せてまとめている。植物相に関する出現種の目録では、環境庁編(二〇〇〇)のレッドデータブック(RDB)における絶滅危惧IB類EN・絶滅危惧II類VUと、北海道編(二〇〇一)による絶滅危惧種En・絶滅危惧種Vu・希少種Rの記号を植物名の後にそれぞれ付記した。さらに筆者が「かなり希少」と考える植物と、低標高地でありながら出現した「高山植物」や希少植物が多く含まれる「岩隙・岩礫地植物」についても、植物名の後に括弧内にそれらを付記した。

二 植生と植物相の観察結果

(一) 仁居常呂川本流・春日林道と支流・下春日林道(置戸町、工区一と工区三、五万分の一地形図「常元」と「小利別」)

〔工区一〕の概況) オホーツク海に流下する常呂川水系上流部、仁居常呂川本流・春日林道と支流の下春日林道の工区一と工区三は、標高範囲約三九〇〜七七〇級の国有林にあり、短距離の農地部分である工区二を挟んでいる。これらの工区は、目下、未着工である。以上の範囲の地質は、沢筋の

工区一と工区二が第三紀系の陸成・海成堆積物(トコロ川層、凝灰岩・砂岩・泥岩・集塊岩)から構成され、峰越しとなる工区三は第三紀系の火山噴出物(トマム川溶岩、普通輝石安山岩など)に被われている。

〔植生〕仁居常呂川本流・春日林道沿い(標高約三九〇〜五〇〇級)の工区一では、河岸段丘が広がり、ハルニレ、ヤチダモ、ケヤマハンノキ、オノエヤナギなどからなる溪畔林が広く発達している。段丘面には、上記のほかに、伐採後に成立したと思われるシラカンバ林やトドマツ・エゾマツの小団林、さらにカラマツ人工林がみられる。斜面には、ミズナラが主体となる落葉広葉樹林や針広混交林がみられる。

農地を通る工区二を挟んで、仁居常呂川の支流に設けられた下春日林道(延長四・七歳、標高三九〇〜六一〇級)の工区三に入ると、下流部にハルニレ、ヤチダモ、オニグルミ、ケヤマハンノキ、オノエヤナギなどから構成された溪畔林が成立し、上流部にはトドマツ、アカエゾマツ、あるいはカラマツの人工林が多く造られている。それらのほぼ中間にある小規模な露岩地周辺(標高約四六〇級)には、エゾナキウサギが生息するが、狭い沢沿いにケヤマハンノキが主体となる溪畔林、斜面にトドマツ、シナノキ、オヒョウニレ、ダケカンバなどからなる針広混交林がみられ、露岩上には後述する岩隙・岩礫地植物などの希少植物が認められる。調査時、上流の標高約六一〇級地点にあるカラマツ人工林が伐採中であった。

以上のように、この地域の植生は、過去から伐採と造林など、植生に対する人為の影響が認められる。しかし、溪畔林を通過する既存林道は十分

な林冠に覆われており、この溪畔林は伐採などの攪乱後かなり時間を経て回復している段階にあると判断された。

〔植物相〕トクサ、マンネンスギ、ヤマドリゼンマイ、ウチワゴケR(岩隙・岩礫地植物)、コケシノブ(比較的希少)、フクロシダ(岩隙・岩礫地植物)、シラネウラボシ、オシダ、カラフトメンマR、ミヤマワラビ、ウサギシダ(比較的希少)、ヤマイヌワラビ、エゾメシダ、イチイ、トドマツ、エゾマツ、アカエゾマツ(植樹)、カラマツ(植樹)、オノエヤナギ、エゾノバツコヤナギ、オニグルミ、シラカンバ、ダケカンバ、ケヤマハンノキ、ミズナラ、ハルニレ、オヒョウニレ、エゾイラクサ、ムカゴイラクサ、ミゾソバ、クシロワチガイソウVU・R、シラオイハコベ、エゾノレイジンソウ(比較的希少)、エゾトリカブト、アカミノルイヨウシヨウマ、ヒメイチゲ、エゾノリュウキンカ、サラシナショウマ、エゾカラマツ、チョウセンゴミシ、ツルネコノメソウ、ツルアジサイ、ノリウツギ、マルバチャルメルソウVU・VU、トガスグリ(比較的希少)、エゾクロクモソウ、ズダヤクシユ、ヤマブキシヨウマ、オニシモツケ、エゾノシモツケソウ(比較的希少)、カラフトダイコンソウ、エゾイチゴ、ホザキナナカマド、ナナカマド、コキンバイ(岩礫地植物)、ヤブマメ、コミヤマカタバミ、ヒロハノキハダ、ヤマウルシ、ツルウメモドキ、エゾイタヤ、キツリフネ、ヤマブドウ、シナノキ、ミヤママタタビ、ミヤマタニタデ、ウド、オオバセンキウ、シヤク、ゴゼンタチバナ、コヨウラクツツジ、ハシドイ、ヤチダモ、オククラムムグラ、ヤエムグラ、エゾニワトコ、レンブクソウ、ノブキ、オオヨモギ、ヨブスマソウ、チ

シマアザミ、アキタブキ、キオン、ハンゴンソウ、コガネギク、ヤマアワ、クマイザサ、ゴンゲンズゲ、ホンバヒカゲスゲ（岩隙・岩礫地植物）、ヒラギシスゲ、マイヅルソウ、ヒメマイヅルソウ（比較的希少）、ミヤマエンレイソウなど。

上記種では、ウチワゴケ、カラフトメンマ、クシロワチガイソウ、マルバチャルメルソウの四種がRDB掲載種であり、とくにウチワゴケは隔離分布を示す北限・東限の新産報告となり、極めて貴重である。上記のほか、コケシノブ、ウサギシダ、エゾノレイジンソウ、トガスグリ、エゾノシモツケソウおよびヒメマイヅルソウは、比較的希少な植物として特記される。この範囲の植生は、低標高にある普通の植物群落（森林）からなり、人為の影響が認められる点で相対的に低く評価されるのに対して、エゾナキウサギの生息とともに、植物相には極めて高く評価される出現種が認められる。さらに自然な景観を回復させた溪畔林は、動物の生息環境として重要と考える。これらの点は、自然の評価・アセスメントが複層的・複眼的に行われなければならないことを示している。

なお、工区一と工区三に関してのみ、二〇〇三年一〇年一三日の別の記録がある。その記録によると、絶滅危惧植物のエゾシモツケEN、イワヨモギVU、高山植物のミヤマハンショウヅル、比較的希少な崖地・岩礫地植物のエゾデンダとヒモカズラの出現を加えることができる。さらに、絶滅危惧植物のキタミフクジュソウVU・VUについては、以降に述べる工区の低標高地に広分布すると思われるが、その確認には早春の調査が必要である。

(二) ニオトマム川・新斗満林道（陸別町、工区四〜五、五万分の一地形図「小利別」と「陸別」）

（「工区」の概況）前項の工区三から峰越しをする陸別町の国有林（資源の循環利用林）に入る。

ここは、太平洋に流下する十勝川水系利別川の上流域、新斗満川の源流となる。既存林道がない峰越し部分が工区四、新斗満林道（延長約一三・六㍎、標高三五〇〜八〇五㍎）が工区五に当たり、ともに未着工である。この範囲の地質は、上流部が第四紀系更新世の火山噴出物（含かんらん石紫蘇輝石普通輝石安山岩）などから構成され、下流部に第三紀系の火山噴出物（トマム川溶岩、普通輝石安山岩など）が認められる。

（植生）河畔ないし河岸段丘には、ヤチダモ、オノエヤナギ、ケヤマハンノキなどからなる溪畔林が成立し、比較的広い段丘上には斜面とともにトドマツ・エゾマツ林やアカエゾマツ人工林も認められる。標高四八〇地点には、エゾナキウサギが生息する露岩地が認められ、後述する希少植物が多く、その周辺の浅土地にはトドマツが多い針葉樹林が成立している。初の沢林道分岐（標高五五〇㍎）付近から上流では沢が狭くなるが河床にケヤマハンノキ・オノエヤナギ林が成立し、斜面にトドマツが優占する針葉樹林が多くなる。標高約六四〇㍎二股は、北海道（一九九一）によるエゾナキウサギ生息地（写真1）であり、ここでもまた、トドマツ林と針葉混交林の林内露岩地に希少植物が多く認められる。この林道沿いには、標高約五〇〇㍎より下流の、比較的広い河岸段丘面の諸処に、木材集積場・土場が認められ、近年のトドマツやヤチダモなどの伐採が認められる。

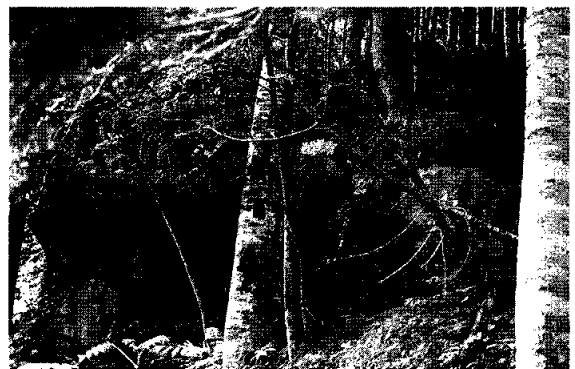


写真1 新斗満林道・林内露岩地

既存林道の終点、ニオトマム川最終二股（標高約八一〇㍎）は、予定ルートを少し外れるが、予定ルート上の峰越しが同程度の標高まで上がるので、周辺植生について記述すると以下の通りである。ここでは、トドマツ、エゾマツ、アカエゾマツ、ダケカンバからなる針葉樹林が成立し、温帯性落葉樹のケヤマハンノキ、ウダイカンバも少し混生している。この他にウスバスミレ、キバナノコマノツメ、ウコンウツギ、チシマザクラなどの高山植物が出現し、希少動物エゾナキウサギも生息している。針葉樹の樹幹には、地衣類のヨコワサルオガセが多量に着生しており、この沢は霧の発生が多いと推測された。

以上の新斗満川沿いの植生は、下流部に落葉広葉樹林が認められるが、比較的低い標高にありな

がら、標高五〇〇附近から上流部で針葉樹林が優勢になる特徴がある。

〔植物相〕マンネンスギ、スキカズラ、ホソバトウゲシバ、ヒカゲノカズラ、ヤマドリゼンマイ、コケシノブ(比較的希少)、クジャクシダ、クサソテツ、イワデンダ(岩隙・岩礫地植物)、オシダ、シラネワラビ、オクヤマシダ、ホソイノデ、シノブカグマ、ミヤマワラビ、ウサギシダ(比較的希少)、エゾメシダ、ミヤマシケシダ、ヤマイヌワラビ、エゾデンダ(比較的希少、岩隙・岩礫地植物)、トドマツ、エゾマツ、アカエゾマツ、シラカンバ、ウダイカンバ、ダケカンバ、ケヤマハンノキ、エゾイラクサ、クシロワチガイソウVU・R、エゾトリカブト、アカミノレイヨウシヨウマ、ヒメイチゲ、オオヤマオダマキ(比較的希少)、エゾノリュウキンカ、ミヤマハンショウヅル(高山植物)、サラシナシヨウマ、ミツバオウレン、アキカラマツ、チョウセンゴミシ、エゾキケマン、ナガミノツルケマン、コンロンソウ、ヤマタネツケバナ、アイヌワサビ、ツルネコノメソウ、ツルアジサイ、ノリウツギ、トガスグリ(比較的希少)、エゾクロクモソウ、ダイモンジソウ(岩隙・岩礫地植物)、ズダヤクシユ、ヤマブキシヨウマ、エゾノシモツケソウ(比較的希少)、ヒメゴウイチゴ、チシマザクラ(高山植物)、ミヤマザクラ、エゾシモツケEN、ホザキナナカマド、コキンバイ(岩礫地植物)、コミヤマカタバミ、ヒロハツリバナ、エゾイタヤ、ミネカエデ、オガラバナ、キツリフネ、シナノキ、ツボスミレ、ミヤマスミレ、フイリミヤマスミレ、ウスパスミレ(高山植物)、キバナノコマノツメ(高山植物)、ミヤマタニタデ、タラノキ、エゾウコギ(比較的希少)、エゾボウフウ、オオバセンキユウ、

ヤブニンジン、ゴゼンタチバナ、ハクサンシヤクナゲ、エゾクロウスゴ、オオパスノキ、イワツツジ、コヨウラクツツジ、ハナヒリノキ、ヤチダモ、ミゾホオツキ、ハエドクソウ、クルマバソウ、エゾノヨツバムグラ、オオバノヨツバムグラ、オククルマムグラ、エゾヒヨウタンボクEN、エゾニワトコ、ウコンウツギ(高山植物)、レンブクソウ、ミミコウモリ、ヨブスマソウ、チシマアザミ、アキタブキ、コウゾリナ、ハンゴンソウ、コガネギク、イワノガリヤス、タカネノガリヤス、コメガヤ、クマイザサ、ゴンゲンスゲ、ホソバヒカゲスゲ(岩隙・岩礫地植物)、シヨウジョウスゲ、ヒラギシスゲ、イ、コウライテンナンショウ、ユキザサ、マイヅルソウ、ヒメマイヅルソウ(比較的希少)、ホザキイチヨウラン(比較的希少)、ミヤマエンレイソウなど。

以上の出現種では、絶滅危惧植物としてクシロワチガイソウ、エゾシモツケ、エゾヒヨウタンボクの三種が挙げられるに過ぎないが、かなり希少なコケシノブ、ウサギシダ、エゾデンダ、オオヤマオダマキ、トガスグリ、エゾノシモツケソウ、ヒメマイヅルソウ、ホザキイチヨウランとともに、低標高地出現の高山植物であるミヤマハンショウヅル、チシマザクラ、ウスパスミレ、キバナノコマノツメ、ウコンウツギの出現が特記される。このように特記できる植物が多数挙げられ、この点では、エゾナキウサギ生息地を含んで、低標高地において高山的環境や特殊な環境が散在することを示している。

(三) カネラン峠などの公道部分(陸別町〜足寄町、工区六〜一一、五万分の一地形図「陸別」と「上足寄」)

工区六〜九は、陸別町北斗満から陸別町市街地までの農業地帯を通る、舗装された公道部分である。また、工区一〇〜一一は、陸別町市街地からカネラン峠を経て足寄町鳥取に至る道道併用区間に当たり、数年前に大半の部分が広規格の車道に改良されているが、鳥取に降りる急傾斜部が曲がりくねった砂利道のままにある。

カネラン峠(標高五四六)の駐車場付近(五二〇)の植生は、トドマツ、ダケカンバ、シナノキ、ハリギリ、ハルニレ、カツラ、ヤチダモが混生し、林床にクマイザサが優占した針広混交林である。上記種のうち、通常は湿潤な沖積地に見られるハルニレ、カツラ、ヤチダモが出現することから、ここは、尾根に接した沢の源頭部までかなり湿潤であると思われる。

(四) 足寄川十一線の沢(足寄町、工区二〜一三、五万分の一地形図「上足寄」)

〔工区の概況〕工区二は、北海道林務部(一九九四)の報告書では足寄川三十一線の沢と記述されているが、五万分の一地形図によると一本下流側の支流、十一線の沢に当たり、その起点から二股(標高三五〇)まで延長約五歳の部分が予定ルートとなる。工区一二の工事は、時折水没しそうな河床に接して拡幅されたところがあったが、今なお一部が着工された段階にある。しかし、このルート沿いの森林は、すでに伐採が進んでおり、とくに溪畔林は皆伐状態のところがある。二股から峰を越し、その後工区一三に当たる

茂足寄川沿いの下白愛までは未着工である。

上記のうち、十一線の沢流域は、国有林の水土保持林（水源涵養タイプ）に指定され、茂足寄川は国有林における資源の循環利用林とされている。この範囲の地質は、ほとんど第三紀系の陸成・海成堆積物（硬質頁岩・泥岩・凝灰岩からなる頁岩・凝灰岩層、硬質頁岩・泥岩・砂岩などからなる頁岩・泥岩層）から構成されている。工区一二では、沢筋に崖地が多く認められる。山岸編（一九九三）は、この沢に多数の地すべり地形があることを報告しており、それは上記の地質、比較的古く崩れやすい堆積岩の特徴と対応していると思われる。

〔植生〕 十一線の沢林道の予定ルート（標高二五〇～三五〇m）における植生は、全般に伐採が進



写真2 11線の沢・溪畔林

んでいるが、斜面のトドマツ植林地とともに、所々にハルニレとケヤマハンノキが主体となる溪畔林（写真2）が残されていた。林道起点に近い最初の曲がり角を初めとして、沢筋に崖地が多く、崖地・岩礫地の植物あるいは高山植物が出現する非森林植生が点在している。なお、茂足寄川の工区一三の植生については観察しなかった。

〔植物相〕 イワデンダ（崖地・岩礫地植物）、クサソテツ、オシダ、エゾメシダ、トドマツ、エゾマツ、ネコヤナギ、オノエヤナギ、エゾノバツコヤナギ、ドロノキ、シラカンバ、ケヤマハンノキ、ハルニレ、ミチヤナギ（人里植物）、エゾイラクサ、ムカゴイラクサ、エゾノレイジンソウ（比較的希少）、エゾトリカブト、オオヤマオダマキ（比較的希少）、サラシナショウマ、エゾカラマツ、アキカラマツ、チヨウセンゴギシ、クサノオウ、エゾキリンソウ（崖地・岩礫地植物）、コンロンソウ、ヤマブキシヨウマ、キジムシロ（岩礫地植物）、エゾノシモツケソウ（比較的希少）、ホザキナナカマド、ホザキシモツケVU、コキンバイ（岩礫地植物）、エゾヤマハギ、イヌエンジュ、ヤブマメ、クサフジ、エゾイタヤ、ヤマモミジ、カツラ、ニシキギ、ミツバウツギ、フツクソウ、ハリギリ、タラノキ、ウド、シヤク、ヤブニンジン、ウマノミツバ、ホタルサイコ（崖地・岩礫地植物）、オオカサモチ（高山植物）、エゾムラサキツツジVU（高山植物）、クサレダマ、クリンソウVU、オドリコソウ、クルマバナ、ヤマタツナミソウ、イケマ、ミヤマニガウリ、オオバコ（人里植物）、ハシドイ、エゾヒヨウタンボクEN、オククルマムグラ、ヤエムグラ、チシマアザミ、アキタブキ、ヨブスマソウ、ハンゴンソウ、イヌヨモギ（崖地・岩礫地植物）、オオ

ヨモギ、ヤマニガナ、ヒロハドジョウツナギ、ヨシ、イブキヌカボ、ススキ、エゾミヤコザサ、スズメノテツボウ（帰化植物）、コハリスゲ、オクノカンスゲ、ヒエスゲ（崖地・岩礫地植物）、ホソバヒカゲスゲ（崖地・岩礫地植物）、クサイ、バイケイソウ、ミヤマナルコユリ、オオウバユリ、オオヤマサギソウなど。

以上の出現種には、絶滅危惧植物のホザキシモツケ、エゾムラサキツツジ、クリンソウおよびエゾヒヨウタンボク、高山植物のオオカサモチとエゾムラサキツツジ、かなり希少なエゾノレイジンソウ、オオヤマオダマキ、エゾノシモツケソウ、そして多数の岩礫・岩礫地植物の出現が特記される。

（五）茂足寄川沿い下白愛から螺湾川沿い上

螺湾まで（足寄町、工区一四～一六、五万分の一地形図「上足寄」）

〔工区の概況〕 十勝川水系足寄川の上流部において、茂足寄川の公道を起点とする工区一四は、起点からの距離約三歳まで舗装とトンネル工事が完了し、それに続く工区一五の中で最初の約三歳部分は拡幅を終えた砂利道の段階にあり、その後、螺湾川沿いの上螺湾を超える峰越しの峠まで掘削工事中であった（写真3～6）。上螺湾側の工区一六は、公道から約一歳の部分で拡幅工事が完了していた（写真7）。これら茂足寄川から螺湾川までの工区は、掘削工事に至らない部分も含んで、予定ルートすべての森林伐採が完了しており、置戸・阿寒線において工事が最も進捗していた。

以上の範囲は、国有林の利用区分によると水土保持林（水源涵養タイプ）とされている。この範

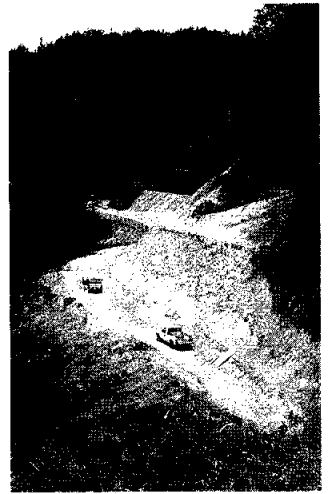


写真3 茂足寄川・工事中の林道

囲の地質は、前項と同じ堆積岩から構成されているが、山岸編（一九九三）には、地すべり地形が余り多くないことが示されている。

ところで、茂足寄川沿いの公道は、帯広・足寄と阿寒湖と結ぶ国道であり、螺湾川沿いの公道は、雌阿寒温泉からオンネトーを経て上螺湾、螺湾に至る公道である。これらはそれぞれ、緑資源幹線林道よりはるかに利用度が高く、とくに後者の道道は、細い規格の曲がりくねった道路が舗装された現状にある。これら利用度の高い公道とそのように思うことができない広規格の緑資源幹線林道を対比すると、後者は、とくに本工区において、必要性の高さではなく、単に、工事が容易な工区から工事が進捗しただけにすぎないとの印象を持った。

〔植生〕茂足寄川の南東側（標高二九〇〜四九〇㊦）の植生は、斜面に針広混交林とトドマツ林が成立し、置戸から続いて低い標高範囲にあるが、針葉樹林の発達が著しい。他方、螺湾川の西側（標高四二〇〜四七〇㊦）のうち公道から約一棧の範囲では、トドマツ、エゾマツ、オオバボダイジュ、シナノキ、ハリギリ、カツラなどからなる針広混

交林がみられた。ところが、とくに工区一五の未舗装部分では、溪畔林が完全に伐採されており、その破壊が著しい。現在、掘削中の峰越し部分は、螺湾側とともに、第三紀系の堆積岩からなる急傾斜地となっており、幅員五㊦に規模を縮小したと言われるが、両側の針葉樹林を伐採して幅一〇〇㊦を超える法面が造られている（写真3〜4）。なお、緑資源幹線林道の建設では、在来種工法の採用が喧伝されているが、工区一五で新しく造られた法面には、外来のイネ科植物やイタチハギ、本州産ハギ類が植えられ（写真6〜7）、フランスギク、ヒメスイバ、ナズナ、アカザ、スカシタゴボウなど、帰化植物・人里植物が多量に繁茂し、「看板倒れ」と言うことができる逆の実態がある。

〔植物相〕ヤマドリ

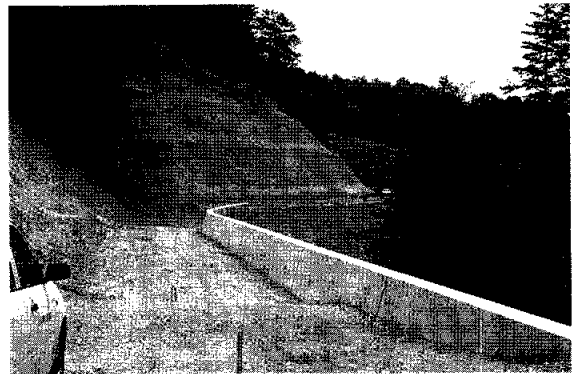


写真4 茂足寄川・広いのり面



写真5 茂足寄川・溪畔を通る林道

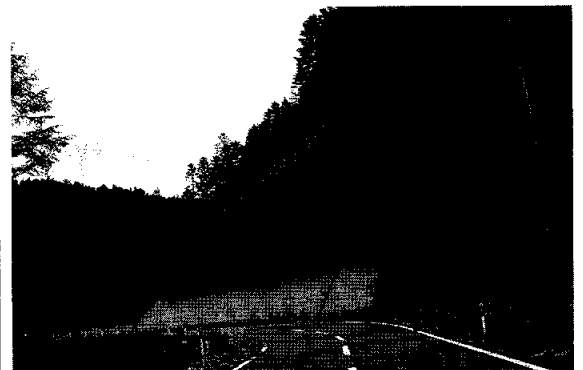


写真6 茂足寄川・在来種工法？の外来種植栽

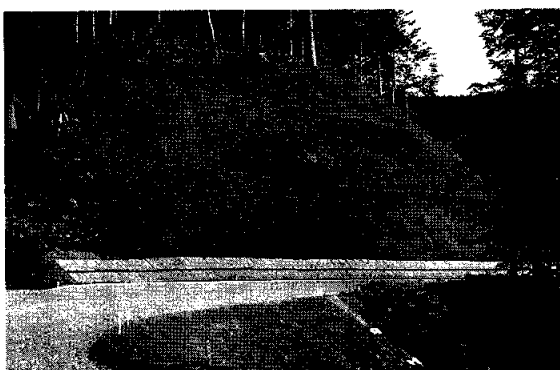


写真7 螺湾川・外来植物による植生工

ゼンマイ、クジヤクシダ、オシダ、シラネワラビ、ナライシダ、ジユウモンジシダ、ミヤマワラビ、トドマツ、エゾマツ、ヒトリシズカ、ダケカンバ、ミゾソバ、ヒメスイバ(帰化植物)、アカザ(帰化植物)、カツラ、エゾノレイジンソウ(比較的希少)、エゾトリカブト、アカミノレイヨウショウマ、エゾイチゲ、オオヤマオダマキ(比較的希少)、サラシナシヨウマ、ミヤマハンシヨウツル(高山植物)、アキカラマツ、ホオノキ、クシロワチガイソウV・U・R、ナズナ(人里植物)、スカシタゴボウ(人里植物)、ミツバベンケイソウ、チシマネコノメ、ツルネコノメソウ、ツルアジサイ、マルバチャルメルソウVU・Vu、トガスグリ(比較的希少)、ズダヤクシユ、エゾイチゴ、ホザキナナカマド、ナナカマド、コミヤマカタバミ、フツキシソウ、ヒロハツリバナ、オガラバナ、シナノキ、オオバボダイジュ、ミヤママタタビ、ミヤマスマレ、フイリミヤマスマレ、ミヤマタニタデ、ハリギリ、ウド、タラノキ、エゾボウフウ、ゴゼンタチバナ、ハクサンシヤクナゲ、エゾオオサクラソウR、ミゾホオツキ、エゾヒヨウタンボクEN、イケマ、クルマバソウ、イヌヨモギ(岩隙・岩礫地植物)、ミミコウモリ、コガネギク、ヨブスマソウ、フラスギク(帰化植物)、イワノガリヤス、コメガヤ

(岩隙・岩礫地植物)、ミヤマネズミガヤ、エゾミヤコザサ、ホソバヒカゲスゲ(岩隙・岩礫地植物)、ゴンゲンスゲ、ヒゴクサ、クサイ、マイヅルソウ、クルマユリなど。

上記種では、絶滅危惧植物のクシロワチガイソウ、マルバチャルメルソウ、エゾオオサクラソウおよびエゾヒヨウタンボクの四種、比較的希少なエゾノレイジンソウ、オオヤマオダマキ、トガス

グリ、そして高山植物のミヤマハンシヨウツルが特記される。

(六) 庶路川本流林道と奥庶路林道(白糠町、阿寒富士南斜面、工区一七〇二二、五万分の一地形図「上足寄」、「阿寒湖」および「ウコタキヌプリ」)

(工区概况) この地域は、太平洋に直接流下する庶路川最上流部、阿寒国立公園の南側に位置し、行政的には白糠町に属し、土地所有形態は国有林の水土保全林(水源涵養タイプ)である。足寄町からの峰越し部分となる工区一七と、白糠町に属する工区一八〇二二は、未着工である。これらの工区は、予定ルート(東西方向ではなく、南方向からさかのぼる長い二つの林道(ともに標高三〇〇〜八〇〇)の最奥地に予定されている。一つは庶路川本流林道でコイカタシヨロ川沿いに延長約一六歳、もう一つは奥庶路林道でコイボクシヨコツ川沿いに調査した標高五六〇地点までで約一三歳ある。これらの予定ルートは、阿寒富士南斜面の森林限界下方、阿寒国立公園の境界線から南に外れた付近(写真8〜12)にある。

ところで、上記二つの林道入り口(標高約三〇〇)に至るには、白糠・本別間公道の途中にある二股から庶路ダムに至るまで滝上連絡線林道を約一二歳、庶路ダムから上記林道入り口に至るまで林道を約一三歳進む。結局、下流側から工事予定地に至るためには、さきに挙げた一〇数歳を合わせて公道から合計約四〇歳に及ぶ狭い規格の長い林道を使用しなければならない。林道の運転に比較的馴れているはずの筆者でも、白糠・本別間二股から工事予定地までの砂利道通過に、車で片



写真9 庶路川本流林道・高山植物オオタカネイバラ



写真8 庶路川本流林道と阿寒富士



写真 11 庶路川本流林道・ハクサンシヤクナゲ



写真 10 庶路川本流林道・高山植物イソツツジ

道約一時間三〇分を費やしている。
 庶路川上流における予定ルート⁽¹⁾の地質は、以下の通りである。足寄町からの峰越し部分となる工区一七〜一八は、新第三紀系の堆積物（上支湧別層、礫岩）、古第三紀系の堆積物（礫岩・礫質砂岩・石炭からなる留真層と、泥岩・砂岩からなる茶路層）からなり、阿寒富士南斜面の工区一九〜二一では、高標高地側が第四紀の火山噴出物（含かんらん石紫蘇輝石普通輝石安山岩）、低標高地側が古第三紀系の堆積物（留真層、礫岩・礫質砂岩・石炭）から構成されている。阿寒町への峰越しとなる工区二二では再び古第三紀系の堆積物（茶路層、泥岩・砂岩）が認められる。以上の地質の交代は、比較的急峻な地形を呈する東西両端の峰越し部分と、スコリア溶岩流に被われた、緩傾斜の阿寒富



写真 12 庶路川本流林道・伐採されたアカエゾマツ林

土南斜面の地形変化に対応している。
 〔植生〕庶路川本流林道の標高四二〇m以下と奥庶路林道の五六〇m以下の植生は、沢沿いにケヤマハンノキ、カツラ、ハルニレ、ヤチダモなどからなる溪畔林が、斜面にはトドマツにミスナラ、エゾイタヤなどの落葉広葉樹が混生した針広混交林がそれぞれ成立している。
 庶路川本流林道は、左岸をさかのぼるが、右岸に渡った地点（標高四二〇m）から阿寒富士の火山噴出物（スコリア溶岩流）が法面に露出するようになり、その上に成立したアカエゾマツ林の領域に入る。林床では、高山植物のイソツツジ（写真10）、コケモモ、マルバシモツケ、オオタカネイバラ（写真9）、ハイマツなどともに、アカエゾマツの稚樹や若齢木、ハクサンシヤクナゲ（写真11）、ゴゼンタチバナ、マイヅルソウ、ヤマドリゼンマイ、ヒカゲノカズラ、ミヤマワラビ、イワツツジ、コヨウラクツツジ、エゾクロウスゴ、オオバスノキなど亜高山ないし高山性の植物が多く出現する。林道沿いにイソツツジ、マルバシモツケ、オオタカネイバラ、ハクサンシヤクナゲなどの開花が多量に認められ、このアカエゾマツ林は景観的にみても特異で貴重なものだと判断された。ただし、このアカエゾマツ林は、かなり伐採されており、林道沿いに多数の土場が認められたこと（写真12）、そして林道沿いや土場周辺に多数の帰化植物が高山植物と並んで生育していたこと、これらはまことに残念な状況にあった。他方、奥庶路林道の標高約五六〇mから上部でも、阿寒富士のスコリア溶岩流が見られ、庶路川本流林道沿いと同様に、イソツツジ、コケモモなどの高山植物が豊富なアカエゾマツ林が認められた。

以上の範囲は、ほとんど山地帯の温度的気候下にある。それにもかかわらず、ここに成立した針葉樹林・アカエゾマツ林は、多量の高山植物を伴って森林限界を形成している。この森林は、大雪山国立公園十勝連峰の望岳台から十勝岳温泉にかけてみられる十勝岳泥流上で森林限界を形成するアカエゾマツ林と種類構成も相観も非常に良く似ている。このようなアカエゾマツ林は、火山溶岩流の形成後に始まった植生遷移の途中段階にある群落(途中相)と考えることができる。ところが、阿寒国立公園に近接し、しかも森林限界付近にあるにもかかわらず、このアカエゾマツは強度に伐採され、人為の影響が著しい。本来であれば、少なくとも、このアカエゾマツ林が成立する範囲は、国立公園に組み込まれるべきであった。

このように伐採による多大な影響を受けたアカエゾマツ林は、植生の自然性(植生自然度)の観点からは低い評価を受けるが、今なお種類構成の特異な貴重群落であることは確かであり、また高山植物の多量な開花が景観的に優れている。以上の範囲は、将来、特異な種類構成をもったアカエゾマツ高木林に回復していくと予測されるので、今でも国立公園に組み込むべき高い価値を持っている。

〔植物相〕ヒカゲノカズラ、ヤマドリゼンマイ、クサソテツ、オシダ、シラネワラビ、ミヤマワラビ、エゾメシダ、オオメシダ、エゾマツ、アカエゾマツ、トドマツ、ハイマツ(高山植物、標高五〇〇以上)、カラマツ(逸脱侵入)、イチイ、オノエナギ、ウダイカンバ、シラカンバ、ダケカンバ、ミヤマハンノキ、ケヤマハンノキ、ミズナラ、ハルニレ、エゾイラクサ、ムカゴイラクサ、

エゾトリカブト、オオヤマオダマキ(比較的希少)、サラシナショウマ、ミツバオウレン、アキカラマツ、エゾカラマツ、カツラ、クサノオウ、コンロンソウ、オオミミナグサ、ノリウツギ、エゾクサイチゴ(比較的希少)、カラフトダイコンソウ、シウリザクラ、エゾヤマザクラ、オオタカネイバラ(高山植物)、エゾイチゴ、マルバシモツケ(高山植物)、ホザキナナカマド、ナナカマド、シロツメクサ(帰化植物)、ヤマウルシ、アカミノイヌツゲ、エゾイタヤ、ヤマモミジ、ハウチワカエデ、オガラバナ、キツリフネ、シナノキ、ミヤマタタヒ、タラノキ、ゴゼンタチバナ、イソツツジ(高山植物)、ハクサンシャクナゲ、コヨウラクツツジ、コケモモ(高山植物)、イワツツジ、エゾクロウスゴ、オオバスのノキ、ヤチダモ、アオダモ、イケマ、ミヤマウツボグサ、エゾヒョウタンボクE.N、オオカメノキ、ミヤマニガウリ、オオヨモギ、ミミコウモリ、ヨブスマソウ、フランスギク(帰化植物)、キバナコウリンタンポポ(帰化植物)、ハンゴンソウ、キオン、アキタブキ、コガネギク、セイヨウタンポポ(帰化植物)、タカネノガリヤス、イワノガリヤス、コヌカグサ(帰化植物)、エゾヌカボ、ススキ、クマイザサ、ヒメスゲ、ヒゴクサ、タカネスズメノヒエ(高山植物、四八五¹⁾、マイヅルソウ、オオウバユリなど。

上記種では、絶滅危惧植物としてエゾヒョウタンボクだけが挙げられるが、ハイマツ、オオタカネイバラ、マルバシモツケ、イソツツジ、コケモモおよびタカネスズメノヒエは、低標高のスコリア溶岩流に侵入した高山植物として高く評価される。

(七) 鮎別川(阿寒町、工区二三、二四、五万分の一地形図「阿寒湖」と「徹別」)

〔工区二の概況〕白糠町からの峰越し部分である工区二三は、未着工のままにある。工区二四は、国有林(水土保全林・水源涵養タイプ)の鮎別白水林道に予定されている。阿寒湖・釧路間の国道起点から私有の農地を通る数百メートル部分が舗装されているが、上記林道では一ヶ所上流まで観察したうち、距離約五歳までの間に箱物となる橋梁を中心に断続的な工事が始められている。以上の範囲は、ほとんど古第三紀の縫別層(泥岩・凝灰質砂岩)と茶路層(泥岩・砂岩)からなり、山岸編(一九九三)には、地すべり地形が多数あると記述されている。

〔植生〕鮎別川の観察範囲(延長約一一歳、標高一八〇〜六〇〇²⁾)では、ケヤマハンノキ、ハルニレなどからなる溪畔林、下部の河岸段丘面に造られたエゾマツ人工林、そして斜面に針広混交林が認められる。これらの工区では、工区一二〜一三と同様に、地すべり地形の発達と、とくに標高四五〇³⁾と五八〇⁴⁾の露岩地中心に出現する岩隙・岩礫地植物や高山植物の集中が対応している。

〔植物相〕エゾノヒメクラマゴケ(高山植物、岩隙・岩礫地植物)、ミヤマヘビノネゴザ、イワデンダ(岩隙・岩礫地植物)、オウレンシダ(岩隙・岩礫地植物)、エゾマツ、トドマツ、アサダ、ウダイカンバ、ダケカンバ、ケヤマハンノキ、ミヤマハンノキ、シラオイハコベ、アカソ、アキカラマツ、エゾカラマツ、ホオノキ、クサノオウ、エゾノイワハタザオ(高山植物、岩礫地植物)、ヤマハナソウ(岩隙・岩礫地植物)、ダイモンジソウ(岩隙・

岩礫地植物)、エゾキリンソウ(岩隙・岩礫地植物)、ホザキナナカマド、ヒメゴヨウイチゴ、ヤマブキシヨウマ、ヒロハノキハダ、ハウチワカエダ、エゾイタヤ、シナノキ、ヒメアカバナ、ホタルサイコ(岩隙・岩礫地植物)、カワラボウフウ(岩隙・岩礫地植物)、エゾノヨロイグサ、オオバスノキ、ヤマタツナミソウ、エゾミソガワソウ、センボンヤリ、ハンゴンソウ、クマイザサ、イワノガリヤス、ギョウジャニンニクなど。

三 北海道林務部(一九九四)の「大規模林道置戸・阿寒線計画路線における自然環境調査報告書」における植生調査に関する問題点

(一) 標記報告書の植生調査結果における結論
標記報告書(一九九四年、平成六年三月)は、前書きに「植生の役割は昭和五五・五六年度調査と全く同じである」と書かれ、その時点で新たな植生調査が行われていない。そして、「むすび」には、以下の結論(全文引用)が書かれている。すなわち「計画路線周辺は未開通の峰越し部分の一部を除き既設林道、作業道を中心に択伐林や造林地が多くを占めており、総体的に森林植生は原生的な面影に乏しい。沢筋の林道、作業道沿いの広葉樹は、人手が多く加わっており、このため道路拡幅または新設によって害を受けることはほとんどなく、あまり無理なく道路を拡幅できる箇所が多いと考えられた。ただし、気象条件の厳しい標高の比較的高い箇所については、開設に当たって林地の保全等に配慮した工法等が必要である。」

以上の結論は、報告書に示された調査結果を根拠にしたに違いないが、その調査方法とその結果は、以下に述べるように、種々の大きな欠陥があり、まことに杜撰なものである。そのため、通常の研究者であれば、上記の結論を述べるべきでないはずである。結局、上記結論は、「はじめに大規模林道ありき」の観点から恣意的に書かれたものと判断できる。その理由について、詳細を以下に述べる。

(二) 植生調査の精度は非常に低い

標記報告書において基礎となる植生資料は、総延長約一〇〇歳に及ぶ計画路線に対して合計三二個を数えるだけで、非常に少ない。しかも、植生資料は、合計二四工区のうち七工区(一、三、五、一二、一五、二〇および二四)だけから得られており、既存林道の中でもアプローチが比較的容易な、すでに森林施業が強く進められてきた範囲に偏った資料収集が明らかである。

植生資料の収集状況は、以下の通りである。常呂川上流における工区一と工区三ではそれぞれ六個(調査番号一〜六)と五個(調査番号七〜一一)の植生資料が得られている。工区一では、溪畔林の種類構成を示すヤチダモートクサ群落とケヤマハンノキ・ハルニレートクサ群落の二群落、溪畔においてシラカンバが優勢になるシラカンバノリウツギークマイザサ群落、シナノキークマイザサ群落およびシラカンバハシドイークマイザサ群落の三群落、そして斜面下部の落葉広葉樹林のシラカンバ・ミズナラースゲ類群落、合計六群落が認識され、工区三では、林道奥地のカラマツ造林地、溪畔林であるケヤマハンノキノリウツギ

ーリヨウメンシダ群落、ヤチダモークマイザサ群落およびケヤマハンノキノリウツギシダ群落の三群落、そして下流部の斜面に成立する針広混交林であるトドマツ・ミズナラートドマツークマイザサ群落の、合計五群落が認識されている。他方、利別川上流の工区五では七個の植生資料(調査番号一二〜一八)が得られ、溪畔林のケヤマハンノキノリウツギークマイザサ群落、ケヤマハンノキークマイザサ群落およびケヤマハンノキークマイザサ群落の三群落と、針葉樹林であるトドマツークマイザサ群落、エゾマツ・トドマツ群落、トドマツトドマツ群落およびトドマツトドマツトドマツ群落の四群落が認識されている。

以上の一、三および五の三工区における植生資料は、前二工区だけで全植生資料三二個のほぼ三分の一を数え、三工区を合わせた一八個の資料は全資料の約五六割に当たる。このように、比較的短い範囲に多数の資料が集中している。そのため、これら三工区に限ってみると、溪畔林と斜面に成立する森林の内容が理解されるが、他の工区では精度の粗い調査しか行われなかったことを示している。別に、植生資料が集中した工区ではないずれにおいても、エゾナキウサギが生息する露岩地周辺の希少植物が多い非森林植生についてはまったく調査されていない。

足寄川十一線の沢の工区一二では四個の植生資料(調査番号一九〜二二)が得られ、溪畔林のハルニレ・エゾマツークマイザサ群落、ハルニレ・エゾマツ・トドマツークマイザサ群落、ハルニレ・エゾイタヤハシドイークマイザサ群落の三群落と、斜面のミズナラークマイザサ群落の調査結果が示されている。茂足寄川の工区一五では三個

の植生資料（調査番号二三〇二五）が得られ、多種混生針広混交林、トドマツトドマツ群落およびカツラ・ハルニレ・ハシドイーエゾイラクサ群落の三群落が認識されている。これらは、すでに述べた斜面の針広混交林と針葉樹林、そして筆者が記録しなかつた、すでに伐採された溪畔林に関する群落の記述である。最も奥地となる庶路川最上流部・阿寒富士南斜面の工区二〇では三個の植生資料（調査番号二六〇二八）が得られ、トドマツ・エゾマツ・クマイザサ群落（二資料）とアカエゾマツ・エゾイソツツジ群落の二群落が識別されている。最後に、阿寒湖と釧路を結ぶ国道に起

点がありアプロチが比較的容易な飽別白水林道では四個の植生資料（調査番号二九〇三二）が得られ、溪畔林のハルニレ・エゾマツ・クマイザサ群落、ハルニレ・エゾマツ・トドマツ・クマイザサ群落、ハルニレ・エゾイタヤ・ハシドイーエゾミヤコザサ群落の三群落と、斜面のミズナラーサワシバ群落の調査結果が示されている。

しかし、以上に対して、峰越し部分となる工区四、同一三、同一四、同一六〇一九、同一二一〇三の一〇工区を含む合計一七工区において、植生調査がまったくなされていない。これらの工区では、既存林道がなく森林施業の影響が少なかったため、また比較的急傾斜の各河川の源流部となるため、自然植生に被われている。この点から、「峰越し部分の一部を除いて……総体的に森林植生は原生的な面影に乏しい」とする報告書の結論は、決して述べることができない。峰越し部分は、実際には、植生自然度が高い自然植生に覆われた場所が多く、その上で、すべてが河川の源流部に当たるので、とりわけ慎重な自然環境保全が必要で

あり、それに対する道路掘削の影響が十分に把握される必要がある。

また、アプロチが最も遠距離となる庶路川本流林道沿いでは、工区二一に認められるアカエゾマツ林（報告書のアカエゾマツ・エゾイソツツジ群落）が未調査である。したがって、工区二〇〇二一に発達する特異な種組成を持ったアカエゾマツ林について、報告書ではその群落面積の広がりや特殊性がまったく指摘されていない。この庶路川最上流部は、とりわけ特異な植生が発達する地域として高く評価されるべきであった。

以上の点から、基礎資料に基づいた科学的な結論や全体的な評価は、標記報告書では決してできないことになる。

（二）植物相の把握がまったく不十分である

一九九四年は、生物多様性条約の批准と種の保存法の制定翌年に当たり、国内において絶滅危惧植物を含む生物多様性保護の方向が明らかにされた時期にある。この時代的狀況から、植物の調査においては、本来であれば、植生とともに絶滅危惧植物を含む植物相（フロラ）の把握が必要であったが、植物相はまったく調査されていない。また、植生調査結果でも、植生資料の詳細、すなわち出現種すべてが示されるべきであるが、標記の報告書には、その詳細が示されず、植生概況の記述の中で代表的な出現種が記されている。

筆者による調査結果は、時折立ち止まって踏査した植生概況と出現種の記録と、車窓から確実に判断できる樹種の記録に基づくが、それですら植生、植物相ともに概況調査にすぎない。しかし、標記報告書に記述された出現種数は、全般に筆者

の記録より少なく、とりわけ筆者が挙げた絶滅危惧植物や希少植物はほとんど記録されていない。これもまた、事業者による調査がまったく不十分であったことを示している。

また、報告書に示された植生資料の出現種の記述には、デタラメと言える植物名の記述や同定の誤りが推測される植物が少なくない。工区五と二四に示されたコウヤノマンネンズギは、維管束植物ではない大形蘚類のコウヤノマンネンズギか、シダ類のマンネンズギのいずれかを指すものと憶測されるが、正体不明の植物である。また、工区二〇におけるウラジロスノキは、通常ではまったく使用されない植物名であり、おそらくオオバスノキかエゾクロウソグを指すと憶測されるが、正体不明の植物である。これらは、この報告書の信頼性を非常に低めている。

工区一二と二四に記述されたオクトリカプトは、北海道の西半部において分布の北限・東限に達し、筆者は現地で観察できなかったため、おそらくエゾトリカプトなどの誤同定と思われる。しかし、もしも誤同定でないとするならば、隔離分布する同種の新産地として非常に高く評価されなければならない。また、工区五において、群落名に使用されたホソバヒカゲズギは、通常は岩上に生育し、報告書のように針葉樹林の林床で群落名に使用されるほど優占する例は筆者の経験にはない。同植物はおそらくゴンゲンスゲなどと同定を誤っていると思われるが、報告が正しいとするならば、それが出現する針葉樹林は極めて貴重な群落として特記されなければならない。工区五などに記述されたエゾスグリは、北海道東部にも分布するが、筆者の観察結果と照合すると、道東に

多他のスグリ属植物、例えばトガスグリと誤同定した可能性がある。報告が正しいとするならば、エゾスグリは道東では数少ないので保護すべき植物に挙げられる。工区一二のクルマムグラは、おそらくオククルマムグラではないかと思われる。工区二四のアキノキリンソウは、同じ種内変異のミヤマアキノキリンソウ(コガネギク)との誤同定であると考ええる。さらに、工区一などにおいてエゾシヨウマ(サラシナシヨウマ)、ベニイタヤ(アカイタヤ)、アイバソウ(エゾアブラガヤ)など、現在一般的な各種文献で使用される和名(括弧内に示した)を使用せずに、道内の植物研究初期に使用されたものを使用する点で、報告書は植物学研究の時代背景に合致していない。

以上のことから、事業者による調査では、植物相の把握がまったく不十分であり、植生調査においても種の同定能力が決して高くない調査者が杜撰な調査結果を作成したことが明らかである。このことは、そのような調査者に調査を委託した事業者側の大きな責任である。

(三) 植物的自然の評価が根本的に誤っている

報告書の結論は、森林植生に人為の影響が加わって原生的な面影がないため、植生の価値が低いので、大規模林道を造って良いという論理構成である。これは、(一)で既に述べたように、既存林道周辺だけを観た結果に基づき、峰越しなど既存林道がない自然林に覆われた範囲を無視した結論であるので、まったくの誤りである。他方、報告書で指摘されているように、既存林道がある範囲では、過去に伐採が進んで「人手が多く加わった」ことは確かである。しかし、既存林道がある

範囲でも未着工の工区では、ハルニレ、ヤチゲモ、ケヤマハンノキなどから構成される溪畔林が、過去の伐採攪乱からかなりの時間を経て相対的に自然な状態に回復した場所が少なくない。過去の攪乱後回復した溪畔林は、植物だけではなく動物の生息地環境としても高く評価されるが、この点は、報告書ではまったく記述も評価もなされていない。

それに対して、緑資源幹線林道工事が着工中、あるいはその直前段階にある工区では、上記のような溪畔林が新たに皆伐状態にされ、大規模な林道が掘削されている。このことは、大規模林道の目的や現在の森林行政の方針である「公益機能の重視」の観点から言うならば、本末転倒な行為である。溪畔林は、公益機能のうち、土砂流出などの災害を防ぐ機能だけではなく、希少野生動物の生息地として生物多様性保護の機能が非常に高い場所である。置戸・阿寒線は、比較的低い標高地が選ばれているが、ほとんどすべての工区において、河川の源流域を次々と横断しており、それぞれ下流域の自然に対する影響は測りがたい。

他方で、絶滅危惧植物を含む植物相の把握がまったく不十分であるので、その観点での評価が別途、必要である。例えば、筆者が報告したウチワゴケなどの希少植物、あるいは正しい同定と考えた場合の報告書にあるオクトリカブトの生育地は、必ず保護すべき対象となる。

地域の植物的自然は、植生自然度だけではなく、絶滅危惧植物や希少植物の分布、さらには遺伝子の異なる地域個体群など、複層的・複眼的な評価が必要である。少なくとも、レッドリスト掲載種に関する調査は必ず必要である。生物の評価をす

るならば、その上で、各種の動物の生息と評価を重ね合わせる必要がある。さらに災害防止など生態系レベルでの自然の把握と評価は、さらに加えるべき観点である。

(四) 以上のコメントに関するまとめ

まず、置戸・阿寒線の予定ルートを含む地域を対象とした植物研究は、過去にほとんどないことを言わなければならない。その理由として、予定ルートが大雪山国立公園と阿寒国立公園のはざまにある比較的低い標高地にあることから、もっぱら林業対象地域と考えられ、各種法令による保護地域にされてこなかった経緯が考えられる。しかし、予定ルートに既存の保護地域がみられないとしても、生物多様性保護が重視される現在、植生についても植物相についても確実に十分な基礎資料を収集した上で、それに基づいた環境影響評価が必要である。

また、既存林道が設けられた範囲では、過去から択伐や皆伐が進んだ結果、それぞれの下流域では植林地(人工林)が設けられているところが少なくなく、上流域においては植林が進まないままに伐採跡地が多少とも開放的な空間を形成しているところもある。それを「原生的な面影がない」(植生自然度が低い)から大規模な林道を造っても良いと考える論理構成が正しいのか検証されなければならぬ。この点は、緑資源幹線道路(大規模林道)や林野行政の目的に深く関わるので、単に影響が少ないから建設可能であるとの結論ではなく、本来の目的との整合性が、植生調査結果の結論でも述べられるべきである。

現在の林野行政の方針、「公益機能の重視」の観

点から考えると、峰越し部分のように自然林に手を加えない・伐採しない地域、溪畔林のように伐採後に自然の回復を待つ方が良い地域、既存の林道を使用して人工林の管理や複層林化を図る地域のように、利用と保護の区分を総合的に考え併せなければならぬ。大規模林道に掲げられた初期の目的、林業重視は、既存林道を使用するだけで十分に果たせると考える。

逆に、伐採され自然な回復を待っている溪畔林の範囲と伐採が及ばない峰越しなどの自然植生に覆われた範囲のいずれにおいても、大規模な林道の掘削は、その目的とは反対に、森林を中心とした自然の破壊に結果する危険性が高い。事業者は、以上に指摘した問題点について、十分な調査に基づいて十二分に答える必要がある。

国有林の利用区分によると、予定ルートには、多くの水土保全林（水源涵養タイプ、旧水源涵養保安林）が設けられている。しかし、この大規模な林道は、地元の要望と北海道の了解を得た形にして、災害防止など地元への負の影響を吟味しながら、いまま建設中なのである。

四 最後に

繰り返してしまいが、自然の保護と利用は、十分な科学的調査に基づいて、慎重に考えるべきである。それを無視した開発行為は、いつさい信頼できないと筆者は考えている。置戸・阿寒線は、基礎調査がまったく不十分であり、信頼できない開発行為の全国代表例と判断する。

置戸・阿寒線における工事の進捗状況は、この長大な林道建設工事が予算的背景から非常に緩慢

に進められる状況にあるのに、また、多岐にわたる疑念にはいつさい答えないままにあるのに、それらに対して、工事が特定の工区に集中せずに虫食い状態のように各工区でわずかずつ展開されている。この点について、何よりも、それぞれの工区が着工中という「既成事実づくり」にあるのではないか、そのような疑念を持たされる。

また、予定ルート沿いの森林は、工事に先立って皆伐が先行し、それ以前の自然状態が失われている。しかもその破壊は工事着工まで、あるいは緩慢な工事であることから着工中でも、しばらくの間放置され、土砂流出など新たな災害の悪影響が考えられる。このような生態系レベルでの自然破壊は、地元住民の生活環境への影響として無視できないものである。

事業者側の報告書には、低い標高地で希少な生物がいないから影響が少ないとの論理構成があり、現在では、公道と結びつけた地域間ネットワーク形成など、「とってつけた」目的が加えられ、地元の期待を煽っている。しかし、置戸・阿寒線の予定ルートは、比較的低い標高地にありながらオホーツク海と太平洋、すなわち北見側と十勝・釧路側を境界づける分水嶺に近い地域を通過している。このことから、そのような源流地域における道路掘削は、河川を通じて広範囲に影響が及び、地元住民にとっては災害という負の遺産に結びつきかねない。以上について、道民こそって、再度、考え直す必要がある。

筆者は、溪畔林で述べたように、伐採攪乱後に回復した森林は、現在まで低い評価しか与えられなかったが、今後は林野行政の基本方針に関わって、非常に高く評価すべきと考えている。いまや、

過去とは異なる多様な見方から森林の持つ価値を見直すべきである。そうした観点を含んで、置戸・阿寒線の植物的自然は、自然を正しく把握も評価もしない大規模な林道の建設によって、決して破壊されてはいけぬと考える。

ところで、筆者は、今回の調査において車両で入る工区すべてを観察しようとした。用意した三日間は、札幌からの走行距離が千歳を超える中、各工区に至る時間が長くなり、全体をみるぎりぎり・駆け足の概況調査しかできなかった。すなわち、各工区における観察は、時折立ち寄った地点ごとの記録を主としている。しかしながら、筆者による観察は、事業者の調査報告書に示された植物相の内容より遙かに多数の出現種を確認している。したがって、今後、予定ルートにおける植生と植物相、すなわち生物の多様性を把握するためには、植物の季節を網羅して、それぞれ時間をかけた植物調査が行われなければならない。

以上により、この大規模な林道建設自体の是非について、改めて、十二分な自然の把握を行い、それに基づいた再吟味・再評価が必要であると結論づける。

引用文献

- 北海道保健環境部自然保護課 一九九一。野生動物分布等実態調査報告書、ナキウサギ生態等調査報告書。一五九頁。北海道、札幌。
- 北海道環境生活部環境室自然環境課編 二〇〇一。北海道の希少野生動物植物、北海道レッドデータブック二〇〇一。三〇九頁。北海道、札幌。
- 北海道林務部 一九九四。大規模林道置戸・阿寒線計画路線における自然環境調査報告書。一三

○頁。北海道、札幌。

環境庁自然保護局野生生物課編集 二〇〇〇。改

訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物―レッドデータブック―、8植物I(維管束植物)。六

六〇頁。財団法人自然環境研究センター。東京。

森林開発公団 一九九五。大規模林道置戸・阿寒

線自然環境現況調査報告書。一二二頁+資料一

六頁。東京。

佐藤謙 二〇〇五。大規模林道平取・えりも線の

「様似・えりも区間」の植物的自然について。北

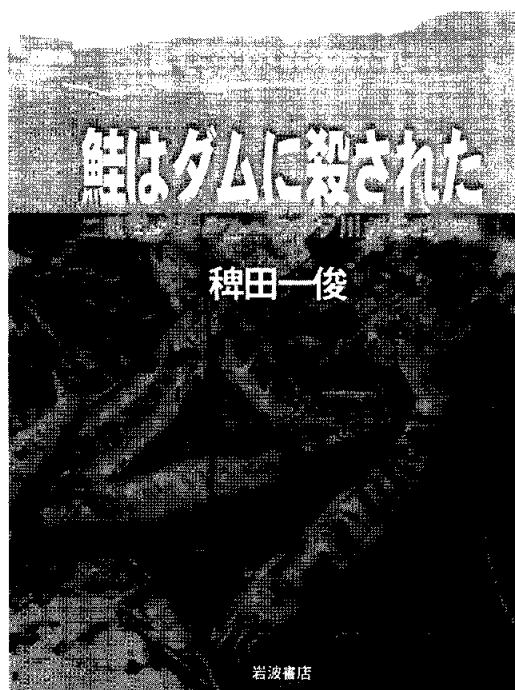
海道の自然、第四三号、四二〜六〇頁。北海道

自然保護協会。札幌。

山岸宏光編・地すべり学会北海道支部監修 一九

九三。北海道の地すべり地形、分布図とその解

説。三九二頁。北海道大学図書刊行会。札幌。



当協会理事・稗田一俊さんの著書です。

『鮭はダムに殺された・二風谷ダムとユーラップ川からの警鐘』（岩波書店、2005年発行、定価1900円+税）

ダムが水害を引き起こす!?

2003年8月、ダム決壊を警告するサイレンが二風谷の住民を震え上がらせた。著者は、北海道の川への徹底的な現状調査で、ダムそのものが引き起こしているさまざまな問題を浮き彫りにしてゆく。いま深い説得力をもって、ダム行政に警鐘を鳴らす。
(本書の帯から)

今日のように一雨で川水が増水することも、広い範囲で川岸が崩壊したり、川に面した山の斜面が崩壊することなど本来あり得ないのだ。しかし、ダムがいったん建設されると、ダムの作用は下流域全域に及び、河岸崩壊、山脚崩壊が目立つようになる。(中略)ダムは人命財産を守るのが目的といいながら、むしろ災害を引き起こす張本人になっている可能性が高い。ダムは人間を生命・財産に及ぶ恐怖に陥れ、川の環境を破壊し続けている現実の姿が浮かび上がってくる。(本文より)